

武蔵野日曜集会

即如

——ヨハネ伝第13章36節～14章21節——

1968年4月7日

小池辰雄

生活の根源の力 心を騒がすな 天国に移住させるため われは道なり真理なり生命なり 天地を貫く至道 何が神を表しているか 我を見し者は父を見しなり パラカエンか 同一性 至道無難禅師・正受・白隠 即死一如 わがうちにキリストあり ミステリオン 我が名によりて願うこと 現象と根源 パラクレートス 獨協大学校歌

【ヨハネ13・36～14・21】

36 シモン・ペテロ言う『主よ、何処にゆき給うか』イエス答え給う『わが往く処に、なんじは今に従うこと能わす。されど後に従わん』³⁷ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、我は汝のために生命を棄てん』³⁸イエス答え給う『なんじ我がために生命を棄つるか、誠にまことに汝に告ぐ、なんじ三度われを否むまでは、鶏鳴かざるべし』

1 『なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。』²わが父の家には住処^{すみか}おとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処^{ところ}を備えに往く。³もし往きて汝らの為に処を備えば、復^{また}きたりて汝らを我がもとに迎えん、わが居るところに汝らも居らん為なり。⁴汝らは我が往くところに至る道を知る』⁵トマス言う『主よ、何処にゆき給うかを知らず、争^いでその道を知らんや』⁶イエス彼に言い給う『われは道なり、真理^{まこと}なり、生命^{いのち}なり、我に由らでは誰にても父の御許^{みもと}にいたる者なし。⁷汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。今より汝ら之を知る、既に之を見たり』⁸ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』⁹イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。¹⁰我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等という言は已によりて語るにあらず、父われに在^{いま}して御業^{みわざ}をおこない給うなり。¹¹わが言うことを信ぜよ、我は父におり、父は我に居給うなり。もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。¹²誠にまことに汝らに告ぐ、我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。¹³汝らが我が名によりて願うこ



とは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。¹⁴何事^なにても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。¹⁵汝等もし我を愛せば、我が誠命^{いましめ}を守らん。¹⁶われ父に請わん、父は他に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給うべし。¹⁷これは真理の御霊^{みたま}なり、世はこれを受けること能わず、これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、また汝らの中に居給うべければなり。¹⁸我なんじらを遺して孤児^{みなしご}とはせず、汝らに来るなり。¹⁹暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも活くべければなり。²⁰その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを汝ら知らん。²¹わが誠命^{いましめ}を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己^{おのれ}を顕すべし』

●生活の根源の力

皆さんは、この福音を受けとって、私たちの生活の根源の力はまさにこの世界から無限に発するものであることを、どうぞ、福音の世界からしっかりと受けとっていただきたい。今日は特にイエスのじかじかの言葉に接するわけです。

³⁶ シモン・ペテロ言う『主よ、何処^{いずこ}にゆき給うか』

「クオバデス ドミニネ」という有名な言葉です。この「クオバデス」という小説はこの言葉を使ったわけです。「主よ、何処にゆき給うか」と。

イエス答え給う『わが往く^ゆ処^{ところ}に、なんじは今は従うこと能わず。されど後に

従わん』

キリストははつきり、ペテロという人の本質が見えてますから。

「今はどんなに力んだってダメだよ。だけれども、後に」

と。この「されど後に」に非常に深い意味があるわけです。何が「されど」であるか、何が「後に」であるか。

³⁷ ペテロ言う『主よ、いま従うこと能わぬは何故ぞ、

ペテロというのは性急で率直ですから。

「どうして今はあなたについて行けませんですかね」

と。

我は汝のために生命を棄てん』

「私はあなたのために生命を棄てます」

と。非常に気負っているわけだ。命懸けで従いますと。人間の決断とか決意とか――よく、プロテスタントでも言いますよ、

「信仰は決断である」



なんて。バルト神学の中にもそういうような言葉があります――けれどもこの決断（エントシャイドウング）は、私なんかも散々経験して、自分の決断がダメなことをよく知っている。夏休みの前に決断して、大いにこれだけやろうなんていったって、やったことがない。何分の一でできたかもしれないようなぐあいだ。もう三日坊主です。

「生命を棄てますよ」

「うむ、お前はなかなか感心なことを言う」

と。

³⁸イエス答へ給う『なんじ我がために生命を棄つるか、

「そうか、私のために生命を棄ててくれるかね」と。

誠にまことに汝に告ぐ、なんじ三度われを否むまでは、鶏鳴かざるべし』

「だけれども、本当にお前に言うけれども、お前は三度私を否むまでは、鶏が鳴かない。鶏が二度鳴いた時には、お前は既にその前に三度私を否むことになる」

と。まあ、驚くべきひとですね、イエスというひとは。どういことが起きて、どうしてこのペテロは三度否むことになるか、これは福音書の終りをご覧になると、ちゃんと書いてある。詳しく書いてある。その通りになった。

「イエスの言い給いしことを思い出して、ペテロはさめぎめと泣いた」

という。明鏡止水どころじゃない、キリストのこの魂の世界は。ちゃんと見通しがついてしまっている。本当に私心なき無の世界。エックハルトもベーメもそういう角度を非常に掘り下げた神秘家です。

●心を騒がすな

「仕方がない。だけれども、うろたえなさるなよ」と。

¹『なんじら心を騒がすな、

人間の心はまことに――「雲水」というね。行雲流水という。行く雲のごとく流れる水のごとしと。

「人の子は枕するところなし」

というのと同じことだ。けれども、今言おうとするのはそういう意味で言っているのではない――定めなく、常なき無常の、非常に流動して定めなきもの。諸行無常という。我々の心は何かに影響されては、風にそよぐ木の葉のように揺れている。だけれども、揺れるなよと。

神を信じ、また我を信ぜよ。

この「信ずる」という言葉をこのような言葉でもつてすぐ、

「信じなさい」

なんてなことを言われても、それはまた空念仏になってしまう。キリストが「信ぜよ」と



言うその内容が、同じ「信ずる」という言葉を使いながらも、まるで普通言うのと違うんです。もう少し平たい言葉でいうと、

「神を本当にお前の当てにしなさい。私を当てにしなさい。自分を当てにしたらいいけませんぞ」

と。自分の信仰なんてものを当てにしてはダメですよ。みんな、この「信ぜよ」というと今度は、

「さあ、信仰、信仰」

といって、自分の信仰を一生懸命で顧みて、信仰を強くし深くしようなんて思って、「信仰」をサムシングにしている。これがそもそも第一の躓きです。「信ずる」というのは、

「自分を当てにしない。自分なんか信じない」

ということですよ。

「神さま、あなたです。主さま、あなたです」

と。

「神を信ぜよ、我を信ぜよ」

ということは、同じことをキリストは言っている。そこにとくにちゃんと出ている。神と我というものは全く一つのもので。

「神を信じてそれから私も信じなさい」

なんてなことではない。

「神を信ずることと私を信ずることは一つなんだよ」

と。それを畳みかけて言われた。

「神を信ぜよ、我を信ぜよ」

と。

「神を当てにしろ、私（キリスト）を当てにしろ。私を当てにしろ、神を当てにしろ。」

これ同じことなり。自分の信仰を当てにするな。信仰を何ものかと思うな」

ということですよ。

●天国に移住させるため

初めての方がいらっしゃるから言いえますけれども、私はお説教しているのではない。聖書はドラマですから、劇ですから、我々自身がこのキリストと問答をする、その相手になっている。今、キリストの現実の中に入っていく。そういう角度で私も語り、あなた方も聴いている。それだけのなし。

私は「について」語っているのではない。私はその「中から」ものを言っている。あなた方も、その「中で」聴いていただかなくては。そういう気持ちで居てくださいよ。あることについてどんなに微に入り細に穿って語りましても、魂には響かない。魂の世界はごま



かがぎきませんから、本ものの火花が散る世界ですから。外側から「について」観察したって、いくら研究したって、そういう研究なんてものはいくらやっただってダメです。もう私ははつきり言っておきます。このキリストにぶつかって降参するまでは入れない。

「参った！ もうどうにもなりません」

と言つてぶつ倒れたら、この世界に入る。そういうことです。しかもそれは、ちつとも私は深刻なことを言っているのではない。もう本当に楽なことです。妙に深刻がる必要はひとつもない。幼児のごとく、童心でいい。それで、ススツと受けとつていく。これが一番楽なんです。自分の氣持を整えようなんて思わなくていい。あるがままで。あるがままで投げ出していく。

「神を当てにしろ、私を当てにしろ。これ同じことであるぞ」という。

2 わが父の家には住処^{すみか}おとし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われは汝等のために処^{ところ}を備えに往く。

素晴らしい言葉ですな。お父さんの家とはつても——地上はもう住宅難で困っているが、天国は決して住宅難でない——それはもういくらでも入れられる。霊界ですから。霊界の天ですよ、これは。

「天はどこですか」

なんて言つたつてしょうがない。霊界の天は無際限に、何億であろうと何百億であろうと、万人をこれ救済せんとする本願を持つた世界ですから。

「私は行きたくありません」

という人は、どうぞ来なくていいですから。それだけのはなしだ。

「どうか行かしてください」

という人は、無条件に入れてくださる。

「われは汝等のために処を備えに往く。もう世の終りも近いが、これから私はお前たちを天国に移住させるための準備をするんだよ」

と。それは私たちはどんな家を造りましたつてダメですよ。どうせ、やがてみんな裸一貫で、何も持たないで、天界に往くわけです。天界に往くか、地獄に往くか、どっちかだ。地獄か極楽か、地獄か天国か。だから、

「何もうろたえなざるな。私を当てにすれば、当てにしそこないはないんだから」

と、こう言うんです。人間は当てにならないです、お互いさま。

「当てにならないなら、それじゃ、私たちは困ってしまったな」

なんてではないですよ。当てにならないものの中に、当てになるものを持つ人が本当の人になる。現実の小池なんていうものは当てにならないけれども、

「この奥に当てになるものがございますから、それはご心配いりません」



と、私ははっきり申し上げる。

●われは道なり真理なり生命なり

³もし往きて汝らの為に処を備えば、復^{また}きたりて汝らを我がもとに迎えん、
わが居るところに汝らも居らん為なり。

引き上げてしまうと。「復^{また}きたりて」と、これは再臨のことです。キリストはまたやっていらつしやる。再臨のことであると同時に、これはまた御霊をもつてきたることと両方かかっているわけです。二重の意味を持っている。

私たちの本国は日本ではなかった。私たちの本国は、

「我らの国籍は天にあり」

とパウロが言ったとおりです。この霊界の神の国。それは同時にこの地界にも現象してますよ。現象してますけれども、どっちみち私たちはせいぜい生きて百年だ。向こう側に往くわけです。そして、それまでに神の国は、世界を引っくり返して来るかは、そいつは知らん。とにかく、死んでも死なないところの――この次は復活節だけれども――その生命を持って生きるところの世界。それを待っているのは、ロマンチックに待っているのではない。現実を持っているから、私たちは既にそれをいただいているから、待つという角度なってくるんです。

⁴汝らは我が往くところに至る道を知る』

少しキリストは先走って言われてしまった。

「私の往くところにお前たちも居らんためであつて、お前たちは私が往くところに至る道を知っている。分かるね」

と言う。ところが、分からない。

⁵トマス言う『主よ、何処^{いずこ}にゆき給うかを知らず、いかでその道を知らんや』

どこへいらつしやるんですか。その道はどんなことなんでしょうかと。正直その通り、分からない。分かったような顔しなかったのがよかったですが。

「大体、分かっています」

なんて言ったらとんでもない。

⁶イエス彼に言い給う『われは道なり、真理^{まこと}なり、生命^{いのち}なり、非常に有名な決定的な言葉ですね。これは定冠詞が付いてますから、

「我こそは道であるぞ、我こそは真理であるぞ、我こそは生命であるぞ」

と。この定冠詞はむしろ、日本語としては「こそは」とでも訳せば、強くでるでしょう。現在・一人称・単数・直説法。一番力強い表現です。「である」という。

「道はこれこれのときものである」

なんて言っているのではない。



「私が道だよ、私が真理だよ、私が生命だよ」

と言う。これがはつきり言える人はいないんですよ。この言葉を聞いただけでも、イエスがもう神の子であることははつきりわかる。そうでなかったら、きちがいだ。こういう断然たる言葉にぶつかって、

「さて、この道というのはどういうものだろうか。真理というのはどういうものだろうか。他にも真理があるじゃないか。生命というのはどういうものだろうか」

なんてなわけで、すぐ疑ったり考えたりする。

キリストは説明しない。いつも断言的にものを言っているだけです。というのは、彼自身が存在そのものをもって、その行為、その言葉がみんな生まのじかじかのものをもって神の事態を現象しているわけです。顕している。

普通、目でものを見ますね。でも、目で聞いたり、耳で見たりする。そういうことが分かりますか。

「目は口よりものを言う」

という。だから、目で人の顔を見ると、その人の心が口で言われるよりもわかる。即ち、これは目で聞いている。また、耳で見ている。音がきて、その世界を直視している。そういつた聞くとか見るとか触れるとかいう、こういった事態も実は非常に深く連関している世界です。決して分析しているのではない。そういうようなことはどうしてできるかというと、その人の在り方が全的であるときにできる。分裂のない、瞬間に自分を投入しているような。瞬間において

「自分はぶっ倒れても悔いはない」

というだけの打ち込みをもって、私も語り、あなた方も聞いている、そういう世界にはもうずんずん通じてくる。

●天地を貫く至道

「私は道である」

という。私はこの「道」という字が大好きでね。大学の校歌にも作ってある。

「天地を貫く至道あり」

と。道というのは非常に東洋的な性格を持った言葉です。老子がまず、道を説いた。合気道とか、弓道とか、柔道とか、剣道とか、茶道とか、みな「道」がつく。他のいわゆるスポーツであつたって、みんな本当は道なんだ。スポーツマンシップという。それは道なんです。ルールがあつて、道がちゃんとある。ルールは外から守るのではない。内側から守るのが本当のルールを守ること。

真理が身に付いている姿を「道」という。キリストは正に真理が身に付いているから、そこで自分は道であると言っている。これは神から人への道であると同時に、人から神へ



の道である。キリストは正にその意味において天地を貫くところの道なんです。「天地を貫く至道あり」というのは本当はキリストのことです。

「我こそは道であり、他にはない。私によらなければ、父のもとに行くことができない」

とあとで言っている。富士山の頂上へ行くには、吉田口もあれば大宮口もあればと、いろいろあるでしょう。けれども、父のもとには私を通らなければ。だいいち、この道の所には門がある、関所がある。

「我は門なり」

という。この我という門を通らなければ、十字架という門を通らなければ、これは入れない。また、

「私は真理である」

という。たくさん自然科学的な真理もあります。芸術でも、あるいはいろんな他の学問でも真理がある。けれども、真理中の真理、他の諸々の真理の根源となるところの真理です。キリストをよく学べば、それで政治がわかるのでも、経済がわかるのでもない。なにも分からんですよ、キリストを学んだって。けれども、キリストという真理を身に付けると、政治をやろうが、経済をやろうが、何をやろうが、その本当の在り方がここから出て行く。そういう意味において、真理中の真理。これは魂の世界において根底的なものを開示しているところの真理です。人間の中心は魂の世界ですから。また、

「私は生命である」

と。なるほど健康法でもつて百年生きるかもしれないが、それは百年にすぎない。けれども、「たとえ今日仆れましても死にませんぞ」

という生命です。相対的な死生を超えた絶対的生命。これが「我は生命なり」ということ。お釈迦さんの世界では、それだけはつきりしたことが言えてない。涅槃の境地という素晴らしい境地はありますけれども、キリストが言ったような、そういう生命とは性格がちがう。

●何が神を表しているか

我に由らでは誰にても父の御許にいたる者なし。

そういう道だと。

7 汝等もし我を知りたらば我が父をも知りしならん。

「私というものが本当にお前たちは分かったら、父が分かったのに。私が分からなくて、神さまはどうだこうだと、神を知ろうとしたってダメだ」

と。いくら哲学で思索しましても、たとえそれで唯神論や一神論が出てきましても、論の結論した神なんてものはどうにもならん。アリストテレスの哲学だって、第一前提としての神ということを言うけれども、それはダメだよ。



この「知る」がヘブライ的な「知る」であって、頭で知るのではない。全存在的に靈知することがこの「知る」ことなんです。全存在をもって。言い換えると、イエスというひとに圧倒されなくてはいいかん。このひとに本当に圧倒されて、

「いやどうも、凄い言葉だ。凄い行為だ。凄い在り方だ」

と。そして、それは傍観しているのではないですよ、「凄い」と言っただけ。

「それに圧倒されてもう本当に他にいきどころがありません」

というようにぐあいには、「他にはどうにもなりません」と言っただけ――まあ、恋人の間でも本当の知るといふのはそういうことだろうけれども。しかし、恋人の間どころのさわぎではない――そういう、

「キリストは、他のものとは代えることができません。私は八方塞がりですが、あ

なたにおいて本当に開かれました」

という意味において、内容において、現実において、キリストというものにぶつかったら、これが「知る」ということ。福音書を読んで、キリストにぶつかって、ここに神の現象体を見た人が本当にキリストを知ったということなんです。ここにおいて私は神を見ましたと。

なるほど、自然の世界でも素晴らしい神の栄光を表すというから、

「大空はその御手の業を示し……」

という詩篇19篇も素晴らしい詩篇なんだけれども、自然において――キリストも野のひとつの花を見て神の栄光を見ました――その意味において、ひとつの石の中にも宇宙の神秘が隠れている。いいですよ、そういう掴み方は。

ではありますけれども、何が神を表しているかといって、イエスほど私にとって神を表しているものはないわけです。キリストに来て、神が見えない人は、どこへ行つてどうやりましても、本当の神には到達しない。これがはつきりしたことです。まあ他に神々もあるでしょう。けれども、このキリストにおいて本当に神にくる。もうこれは万巻の書をどうしようとも、どんなに参考書を読んだって、そこからは出てこない。それはマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネ、この福音書。福音書は聖書のアルファにしてオメガです。

それだけ、このイエスというひとは、水を割らずに神を現象しているひとですよ。

「どうぞ、私をぶつ貫いてあなたが現れてください」

というのが彼の一貫した生命の姿です。あなた方はもうそれでたまらなくなるでしょ。

「そんなこの福音書でしたか」

と。もう註解書なんかいらんですよ。これだけによくぶつかっていく。

●我を見し者は父を見しなり

今より汝ら之を知る、



「今より」という訳はちよつとうまくない。「もう既に」ということです。ギリシア語を直訳すれば、「今より」という字なんですけれども、そういう言い方は「今既に」という意味なんだそうです。

「今もうお前たちは知っている」

と。その次に、「既に」という言葉がまたもういつぺん出ている。

既に之を見たり』

「道だ、真理だ、生命だ」と言っているのに、まだ聞いている方ではボヤボヤしているんだよな。キリストがそう言っているのに。

8. ピリポ言う『主よ、父を我らに示し給え、然らば足れり』

およそ角度のズレた問いをしている。

「父というのはどういのですか。天界を、空を見たって父が見えないではないですか」

なんてなわけだ。だいたい、普通の今の若い方々はそういうことで躓くでしょうね、自然科学的なものの見方をしている人は。私は自然科学を決して軽蔑しているのも何でもない。大いにやってくさいよ、科学でも何でも。ただ、この魂の世界の真理は対象化してつかめる世界でないから言っている。

ここに花があるという、花を観察したって、そういう見方ではない。花の心に自分がないらなければ、花を知ることにならない。花の生命そのものに自分をグーツと入れて、花を内側から見ているような魂にならない。花を見るということにならない。それが自然科学的な認識と、魂の世界の認識の仕方の相違なんです。自然科学的な認識だって真理は真理です。

9. イエス言い給う『ピリポ、我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。』

ピリポがバカな問いをしたから大変結構なことです。ピリポやペテロがみんな分かっちゃったたら、こういう問答がなかったら、分からない方々はいつまでたっても分からない。バカなことを言ってくれたから、

「ああ、そうか、そうか」

といったようなことで、我々が分かるわけです。

我かく久しく汝らと偕に居りしに、我を知らぬか。我を見し者は父を見しなり、

「私を見た者がお父さんを見たんだ。神さまを見たんだよ」

と。どこにも証明はいらんですよ、キリスト自身がそう言っただから。キリスト自身が、

「私を見た者は父を見た」

とはつきり言っただから。

「私は父に似ている」

なんて言っているんじゃない。「父を見たんだ」と。



如何なれば「我らに父を示せ」と言うか。¹⁰ 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。

「我の父に居り、父の我に居給うことを受けとらないのかね」と。

●パラかエンか

私は今日、よつぽど表題にギリシア語の「エン」という字を書こうと思った。これは英語やドイツ語の「イン」「の中に」です。ヘブライ語でいうと「ベ」という字ですけれども、新約聖書でいうところの「エン」というような事態を、旧約聖書ではほとんど見つからない。少しはありますけれども、ほとんどない。そこに旧約と新約のひとつの差がある。旧約はどちらかというと、「共に」の世界。ギリシア語の「パラ」という字です。「パラ」(共に)か、「エン」(中に)かということ。

「私が父のうちに」と。だから、私は「イエスの神秘」と題そうかとも思った。けれども、「即如」という題になった。なかなか、題を一つ書くのでも、いろいろ面白い。この「エン」は「円」に通ずる。いつか私はヨハネ伝の講筵のとき題に「○」を書いた。20何年伝道して「○」を書いたのは初めてだと言って、

なぜ、

「私を見た者は父を見た」

なんていうことをキリストが言い得たか。それは確信で言っているのではない。キリストはちゃんと、卵の黄身みたいに中に、完全に、相似形という言葉もあわないように、質的に同質となっている。これが三位一体の内容なんです。「ホモウジオス」、同質性です。

「似姿」とは、本質的な同質性を持っているものがこの似姿です。似姿という言葉は、なにか少し「似ている」なんて思っているものかんですよ、この場合は。この「ウニ」「合一」性を持つ。「コンユニオン」というのは「共同体」で、これが「共に」「パラ」の方です。「共同」ではなくて、「合一」なんです。そういう合一的な神秘の世界を一面に必ず持つていなければ、私は本当ではないと思う。これは普通の神学者はすぐ、

「それはいわゆる神秘主義だ」

なんてなことを言うでしょう。けれども、キリストが、

「われ父のうちに、父わがうちに。我を見し者は父を見しなり」

と言ったような言葉が、畳みかけてこのヨハネ伝には出てくるんです、これから。一体となっている。一体的なんだ。ただ一緒にいて、なにか「共にある」ということでもって、一生懸命で「共に」ということを外側から意識したって、力になりはしませんよ。

我々だってそうじゃないですか。お父さんやお母さんの血をいただいているでしょ。同質的なものがそこにあるでしょ。だから、お父さんやお母さんが本当に分かるでしょ。本



当に分かるためには同質なものがなければ分らないですよ、異質のものだったら。想像や推測はできるだろうけれども、「本当にそうだ」と言つて共感する世界は、血が流れていなくては。霊血が流れなければ、そこにおいて「ウニ」（合一）の性格がそこになかったならば。もちろん「ウニ」だけでは動きがとれなくなる面もありますから、「コン」という面も必要でしょうけれども、人格体には。

だから、神とキリストは一つであると同時に、神とキリストははつきりと「汝と我」という対立の中にある。この二つの面を持つている。どっちかだけではダメなんだ。しかし、どっちが根底であるかという、この「ウニ」の世界です。

「ウニヴェルジテート」「ユニバーシティ」（大学）という。あれは、諸々のものが「合一的共同体」という意味なんです。単なる共同体ではない。

●同一性

そういう同一性がある。同一性がなくて、そして信ぜよと言つて、さあ一生懸命で外側から信じているのが普通の一般のキリスト教界のひとつの共通な弱点だ。そうでなくてどうして――これはペテロの話になるが、パウロでもそうですが――

「我を視よ」

ということが言えますか、ペテロが。このガタガタのペテロが、聖霊がやつて来たらば、霊血が彼に注がれたらば、このペテロは「我を視よ」ということになった。

レンブラントの絵にも出ている。我々は描かざる画家である。レンブラントさんは素晴らしい画家だが、しかしながら、レンブラントさんにも決して劣らないところの次元をもつて描かざる絵を見ている。歌わざる歌人であり、描かざる画人であり、弾かざる音楽家であるというような人に、皆さん、なつてくださいよ。

それは、本当にこの「エン」の世界に「私」がいるんです。

「私が父に居り、父が私の中に居る」

ということ。

「私が父の中にあるのに、どうして父が私の中にあるか」

なんて、そんな変てこな平面論理で言つたつて分らないよ、こういう言葉は。

「それが分からんか、それが受けとれないか。いつまで私はお前たちと一緒にいたらいいいのか。もういい加減、あきあきしたね」

なんて、キリストに言われてしまうよな。しかし、いつまでキリストがたとえ百年一緒にいたつてダメです。キリストはちゃんと知っている。御霊がくるまでは、どんなに抱きついたつてダメなんだ。御霊がきたら、どんなに離れていたつて一つだ。そういう世界です。

10 我の父に居り、父の我に居給うことを信ぜぬか。わが汝等にいふ言は己によりて語るにあらず、父われに在^{いま}して御業^{みわざ}をおこない給うなり。



われに「内住」「メノーン」して、私の中に内住して、宿つてと。「宿る」という言葉が一番いい。

「私は父に宿り、父はわがうちに宿りたもう」という。

「われキリストのうちに、キリストはわがうちにあり」

と。そこではどうしたつて、溶け合う世界が出てくるではないですか。同質なものが出てきてなぜわるいか。いつまでも、

「罪びと、罪びと。信仰によつて義人とされた」

なんていう命題を信じて、なにが本当の世界かと。私たちはそんな思い込みの世界ではない。

「私が言っている言葉は、私は自分で言っているのではない。これはお父さんが言わせている」

と。私たちがものを言うときに、これはキリストの霊が言わせている。だから千万人といえども、本当の恐れなきことが言え、またなせるようになってくる。

キング (1929～1968) なんていう黒人牧師はまさにそういう人であつた。ケネディさんが仆れ、キングさんが仆れたアメリカには大警告が神さまから来ている。アメリカ人は本当にここで正直に御前に平伏さなかつたら、せつかくピューリタンがうち建てた国がどういうことになるか。ピルグリム・ファーザーズに対して申し訳ないですよ。

ことは他人事ではない。あなた方、いいですか。女の方は乙女であろうと、もの凄いジャンヌ・ダルク以上の力が、この聖霊をいただけば、あるんですよ。なにもジャンヌ・ダルクの真似しろというのではないけれども。私は数を問題にしません。

●至道無難禪師・正受・白隠

白隠和尚の先生が正受老人で、正受の先生が至道無難禪師という。至道という言葉もいい言葉だね。至道難^{かた}からずという。至道というと、大変難しいかと思つたら、ちつとも難しくないと。この正受というのは、信州の飯山のお城の殿様の息子で、三人兄弟であつた。至道無難禪師がその城に訪ねて来たときに、皆は、坊さんが来たから、ひとつ仏さんの絵を描いてくれと頼んだ。そして、この二人には仏さんの絵を描いてやった。ところが、この正受には描いてくれない。

「なぜ、私には描いてくれませんか」

と言つたら、

「お前のお腹の中には観音さまがいる。その観音をお前は見いだしなさい」

と答えた。やはり、この至道無難禪師は人の本質を見る素晴らしい目があつて、その中に観音のような魂がある、お前の魂は観音のような魂だ、観音さまがいると言つた。中に宿っている。



「お前の中には観音がいるぞ。その観音を見いだせ」という。

私たちはこうやって人を見ていてね、

「ああ、あの人は素晴らしい魂だな」

と思うことがある。私はこないだちよつと家内と旅行した時に、ちょうど私の前に坐った女の子がいた。実にその――顔がきれいなんじゃないよ、顔もきれいだけれどもね――心が本当にうるわしいことが一目見て分かった。私はその少女に本当に話しかけたかったけれども、時間もあまりなくて、おしまいになってしまった。

そういった仏心の、

「衆生悉く仏性あり」
（しゅじょうぶつしやう）

という、仏の性を持っている。誰だつて本当はあるんです。やはり、あるひとつのうるわしいものが、清らかなものが私たちにだつてある。けれども、それが残念ながら、力を持っていない。本当の意味において究極的な勝利にならないという面がある。そういった意味において「失われている」ということを言うんです。「パラダイス・ロスト」というのは、「失われている」ということは、何も無いということではない。手放しでは、それは本当にパラダイスを勝ち得ない。大事なこれをこわしてしまふ。だから、その魂を本当に、天来の生命をもつて、光をもつて、力をもつて救い上げようといって、私たち一人びとりの魂は惜しまれている。

「汝のうちに住ませ給いし魂を妬むほどに慕い給う」

と。サタンに盗られては大変だという。

そこで、その正受はそう言われたものだから、

「観音はどこにどんな具合にしているんだろうか」

と、三年間一生懸命で考えて、便所の中に入つても出てこないことがあつたという。ある時、正受はお客さんをもてなして、二階にそのお客さんがいて、梯子段を昇つてお膳を運ぶ手伝いをやっていた。あいかわらず彼はいつも念としているのは、この観音さんのことなんだ。

「昼も夜もエホバの法を思う」

なんて、詩篇一篇に書いてあるが、

「昼も夜もこれ観音を思う」

というわけだ。彼はもうちよつとで二階に上がろうとしたところで足を踏み外して下に落ちて、気絶してしまった。水をかけられて、息をふき返したら、その正受は

「アッハハハ」

と笑った。その時に彼は悟つたという。どん底に突き落とされて、彼は本当に大悟したという。それが13歳の少年ですよ。それから本当に道を求めることのどういうことであるかが分かった。悟りの世界から道を求める。いいですか。聖霊を受けてから、いよいよ道を



求めることができるんです。至道無難禪師というのはそういう彼を見ている。

それから今度は、この正受和尚というのがえらいことになったものだから、白隠は方々ぶつかつているのだけれども、どうもこれはという坊さんにぶつからない。そのうちに、この正受のことを聞いたので、そこに行つて、非常に鍛えられて、白隠は本当に道を知った。本当の無の世界が彼には分かった。いよいよお別れという時がきた。この正受和尚は白隠の手をとつて、普段はなかなか手荒い鍛え方をするのだが、いよいよ別れとなったら――可愛くてしょうがないわけだな――どんどん送つて行つて、とうとう二里の道を一緒に歩いてくれた。

「どうか、身体も大事にしておくれ。お前はこれから本当に法を盛んにしてもらいたい。その様子をもう私は見ることができないだろう。老僧一生の願いは、要らん者をたくさん育てるな。本当の人をただ一人でもいいからつくれ。」と。これが彼の最後の言葉です。本当の禅の世界を身につけた、

「我は道なり生命なり真理なり」

というような角度の、そういう弟子を一人つくれと。皆さん一人ひとり、どうぞ、お一人お一人が、そのような「一人」という人になつていただきたいわけです。

やはり、日本の伝統の中には、精神的な素晴らしい流れがある。どうぞ、日本の歴史をみるならば、そういう面をしつかり見て、我々日本人の中には素晴らしい先輩たちがいた。もはや、その点ではヨーロッパに聞くことはない。キリスト教がヨーロッパに伝わったひとつのマイナスは、非常にギリシア的なものにしてしまった。ギリシア的なものは、科学の世界ではいくら展開してもいい。しかし、宗教の世界ではギリシア的なものは躓きになる。だから、

「ギリシア人には愚かである」

と、パウロが言つたとおりなんです。彼はよく知つてゐるからね。

聖書を本当に身につけて、これを開示する使命は日本人にあるということを、新しくあなた方が自覚していただきたい。私もまだ死にませんぞ。私はとにかく自分のひとつの使命を果たすまでは死なんつもりです。神さまは必ずこれを成就してくださると信じております。

●即死一如

そういうことで、キリストは、もう自分の為すこと言うことがみんなこの「一」の世界です。これを「如」というんです。「一如」という。「即」の事態には何があるかというのと、「即一」「一如」という言葉を「即如」という。この即如という言葉が私が発明したようだけれども――私も自分でそう自然になりますけれども――これは柳宗悦^{むねよし}か、あの芸術家が「即如」という言葉を使つていたので、やはり柳という人は素晴らしい人だと思つた。



「本当の即如の世界は、宗教の本当の信の世界と芸術の本当の美の世界、これだけがこの即如をつかみ得る」

というようなことを柳宗悦が言っているんだな。私はうれしかったね、あの文章を読んだときに。そしてまた、この「即如」という、

「即死一如」

というのが、私がレンブラントの展覧会を見てずっと出てくるときに――出口までに日本のものが少しあった――そこを見たら、宮本武蔵の絵と禅宗の坊さんの書があった。そこにこの「即死一如」という言葉があつたから、これはと思つて、その言葉をつかんだ。

「死に即し一如となる」

と。これは即無と同じことです。福音の世界でいうと、十字架に即し、聖霊にキリストの生命に一如となるのが「即死一如」です。即ち、自分に本当に死んで、キリストと共に十字架されて死ぬところが「即死」です。

「我は生命なり」

というキリストの生命に本当に、

「汝はわが生命なり」

と言つて、このキリストの生命に即するところ。一つ、合一するところ。「ウニ」（合一）の世界に入るところ。これが一如ということ。この同一的一如に入らないで、どうしてこの私たちに力がありますか。外側から「信ずる、信ずる」なんて言つたつて何だという。そういう、「即死一如」の事態です。これはある坊さんから私はつかまえてきた言葉なんです。

●わがうちにキリストあり

「わが言うことを信ぜよ、我は父にあり、父は我に居給うなり。」

「わが言うことを」は間違いだね、

「われに信ぜよ」

ということ。す。「我は父にあり、父は我に居給うなり」と、また繰り返して言いました。

もし信ぜずば、我が業によりて信ぜよ。

もし私の存在が受けとれないなら、私の業を受けとってくれと。この業において神の業が現れているので私がしているのではないよと。

「私の言葉は私の言葉ではないよ」

と、キリストは言っているんです。これ全くキリストが「即死」、自分なんてものは外れてしまつて神と一如になっているからです。

私たちは聖霊を受けとつたら、キリストのこの世界がくる。どんなに我々がガタガタであろうと、そんなことは心配いらぬ。一番奥の世界は、この世界が開示してくるから。

「それでもまだ私はダメです」



なんて、そんなダメな面は段々やつつけていくんだよ。大事な一番中心を捕まえないでいて、ダメもヘツタクレもない。そんなことをいつまで言ってもしょうがない。

¹² 誠にまことに汝らに告ぐ、

即ち、「お前のうちなる観音を見いだせ」という。

「わがうちなる観音、わがうちなるキリストを」

と。これは御霊を受けとれば、

「わがうちにキリストあり」

と、皆さんが言える。本当にぶつつぶれた人がそれが言えるのであって、人間的な謙遜なんて言っている人にはそういうことが言えない。

マルチン・ルターが「謙遜」（フミニテート）という言葉をよく言っていますが、あの「謙遜」（フミニタス）というものがそういったぶつつぶれを受けとってなかったら、ルターの受け損ないである。まあしかし、ルターさんはちよつとお終いは残念でしたけれども。

我を信ずる者は我がなす業をなさん、かつ之よりも大なる業をなすべし、われ父に往けばなり。

まず驚いた言葉ですね。私を本当に受けとって、私と即、死、一如の世界に入ったらば、即如の世界に入ったらば、そうしたらば、私と同じ業をする。

「わがなす業をなさん」

という。キリストを向こう側に置いていて、「わがなす業」なんかできますか。キリストの力が具体的に「ウニ」の世界でやってこないで、どうして「わがなす業」をなせますか。

●ミステリオン

その意味において、「ミステリオン」、神秘というものは――神秘主義ではないですよ、神秘というもの――なにも神秘化して言う必要はない。「ミステイシズム」（神秘主義）と「ミステイク」（神秘）とはつきり区別していただきたい。本当の「ミステリオン」という「奥義」の神秘の世界は、それを持たないで――私たちが皆さんとこうやって、あるいは一人で祈るときに、これは本当に神秘の世界ですよ――

「一体、この言葉は天に通ずるだろうか」

と思つたつて、そんなことを外側から思つたつてどうにもならん。それは電波以上の世界を持つている。そういうような不思議な、私たちが受けとれば、我々の自覚如何にかかわらず、現に私たちの自覚の奥の世界で動いているものがあるんです。それがいわゆる五感的に自覚されなければどうのこうのと、そんなことを言っているのではない。

だから、「我よりも大いなる業をする」というのは、

「私はお前の中に入つて、いよいよ大いなる業をするよ」

ということなんです。



「世の末までも地の極までも私はお前たちの中に自由に御霊となって入って展開していくぞ」

と。キリストは、五千人に分かたれるパンどころのさわぎではない。もう無限に彼は現象して、そして世の末までもと。

キングは仆れても、キングに宿つているところの聖霊は仆れはしない。必ずバトンタッチされて行きます。彼は本当に正しいことのために、人の和のために身を挺していた人です。なぜそれができたか。キリストの霊が宿つていたからです。だから、

「私は父のもとに行つてしまうから。行つたら今度は、私がお前たちの中に入つてきて、どんどん今よりも大きな業をする」という。

「われ父に往けばなり」

という言葉がそれを表している。「行つたらダメじゃないですか」ではない。

「行つたら、今度は霊をもつて入ってくるぞ」

と。そのことがすぐあとから出てくる。

●我が名によりて願うこと

¹³ 汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん、父、子によりて栄光を受け給わんためなり。

どうですか。

「お前たちが私の名を呼んで、主さま!と、全存在をもつて呼ぶこと」

これが名を呼ぶことです。祈りの世界でいい加減に呼んで困りますよ。なにか言葉の継ぎ目みたいに、「主さま」だの、「お父さま」だの、あまり連呼しない方がいい。言う時には本当に全存在をもつて言つてください。

「汝らが我が名によりて願うことは、我みな之を為さん」

と。

「それでは、私は自分の勝手なことを、ただ聖名を呼んでやるか」

なんて、そんな呼び方が聖名の呼び方になりますか。「聖名を呼ぶ」というときには、自分が投げ出されていなければ、「聖名を呼ぶ」ということは空念仏です。聖名を汚すことになる。自分の我意、我欲なんかあつて聖名を呼ぼうものなら、聖名を汚すことになる。そんな呼び方は聖名を呼ぶことにならないから、聴かないよ。キリストが、

「主よ、主よと言う者はダメだよ」

と、その反対のことがちゃんとマタイ伝に書いてある。

「では、これとあれとは矛盾するではないか」

なんて。矛盾も何もしやしない。マタイ伝7章21節に、



「²¹我^{むか}に対して主よ主よという者、

ただ「主よ、主よ」と言つて、えらく連呼したつてダメだと。

ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、
之に入るべし。

本願を本当に受けとる者ですよ、「御意をおこなう」というのは。神・キリストの本願を本当に受けとつて、そこに挺身する者が――「御意をおこなう」というと、何か自力で御意をおこなうと思つたら大間違いです――本願を本当に受けとつて、それを行ずる者が

「御意をおこなう」というんです。

²²その日おおくの者、われに対して「主よ主よ、我らは汝の名によりて預言し、
汝の名によりて悪鬼を逐いいだし、汝の名によりて多くの能力ある業を為し
しにあらずや」と言わん。

「こんなにたくさんのかんことをしたじゃありませんか、あなたのお名前で」

と。名を借りて、まじわぎ的にやる。それはまじわぎ的なことであつて、御意がおこなわれるということではない。

²³その時われ明白に告げん「われ断えて汝らを知らず、不法をなす者よ、我
を離れされ」と。(マタイ7・21、23)

「わが靈法に従つていないではないか、不法をなす者よ」

と。キリストの名をかりて、何かちよつと宗教的現象としてはそういうこともありますから。
これが恐い。それはサタンですよ。

「わが名によりて」というときは、本当に自分が明け渡されているわけです。それは聖名が全的に立つているところであつて、私の側のものが立たないということです。人間ですから、間違つたことをお願いするかもしれない。そのときは、それが聴かれないことが本当に聴かれたことになつてゐる。そして、本願がそこに展開する。聴かれざる祈りこそ、本当にその意味においては聴かれた祈りになつてゐる。祈りは、本当の意味においては、すべて聴かれいくことになるわけです、引つくり返せば。だから、平伏して行かなくては
いかんわけですね。

●現象と根源

「こういうことがなされうるでしょうか、なされないでしょうか」

と、現象面はどうでもいいですよ。根源の現実においては成就されていく、自分の願ひに勝ることがそこに展開しているのであると。

「なんと世の中は不公平ではないか。なんとこいつは不幸じゃないか」

と、いろんな癪に障ることがありますよ。いいですよ、もうひとつ奥の世界で本当のこと



が成っていくから。不当なことをしている人たちはただ神さまの審きを受けるだけのほなし。神さまが、

「^{あだ}仇を返すは我にあり。心配いらんよ」

と。そこにおいて、天網恢々疎にして漏らさず。霊法はどんなに歪められているように見えても、ちゃんとそれは立っていく。

世界はどんなに強そうな者がはびこっていても、剣は剣で倒れていく。暴力沙汰なんかとんでもないはなしです。今のはまだ一部の青年だが、しかし、決して一部ということがいえないものがある。イデオロギーを超えた世界に私たちが突き抜けて、そういった人間にならなければダメです。

だから、本当にこれはありがたく、またうれしい言葉です。キリストは突き抜けているんだから。

¹⁴何事にても我が名によりて我に願わば、我これを成すべし。¹⁵汝等もし我を

愛せば、我が^{いましめ}誠命を守らん。

「誠命を守らん」ということは、今の私たちの言葉でいうと、誠命に即することです。外側から守るのではない。誠命が楽しくて、そこに即するような在り方になっていくぞと。人間はダメだから、まあ誠命は一応必要なんです。そうしては、いろいろ右に曲がつてぶつかつたり、左に曲がつて倒れたり、滑つたりしながら行く。けれども、それが何かではない。中心に本ものがあれば、ちょうど磁石が揺れても北を指すようなくあいになって進んでまいります。

●パラクレートス

¹⁶われ父に請わん、父は他^{たすけぬし}に助主^{たすけぬし}をあたえて、永遠に汝らと偕に居らしめ給

うべし。¹⁷これは真理の御^{みたま}霊なり、世はこれを受くること能わず、これを見ず、

また知らぬに因る。

「私を本当に見た者、私を本当に知った者が、この御霊が本当に見えてくる、分かってくる」

というわけです。この「助主^{たすけぬし}」は「パラクレートス」という字ですが、代弁者、弁護者のことです。共にいて慰めを与える者だから、「慰め主」というような訳になることもありますけれども。要するに、執り成す者です。執り成しの霊です。私たちは分からず屋で躓いたり転んだりするが、しかし、この執り成しの霊が私たちを、

「おつとどつこい危ないぞ」

というように、捕まえてくださる。

「こつちだぞ」

と言って示してくださる。



「さあ私の力を受けろ」

と言つて、推進させてくださる。そういった霊なるキリスト、御霊なるキリスト、トの御霊——どう言つてもいい——これが入ってくれば、御霊によつて、御霊はキリストと同質ですからこの聖霊においてはじめて一如の事態が、如の事態が出てくる。そして本當に御意に即していくことがそこから出てくる。

「天に即して大和あり」

と校歌に書いたのは、神に、キリストに即して本當の大きな和がくる。世界を和となすところの、イデオロギーを超えた世界が展開する。私はこの校歌を自分で解説すれば、もう全部、福音になってしまう。

これを見ず、また知らぬに因る。なんじらは之を知る、彼は汝らと偕に居り、

また汝らの中に居給うなければなり。

ここに、「偕に」「パラ」であると同時に、「の中に」「エン」であるを書いてある。

「この聖霊は、祈りの世界でお前たちと一緒に、汝と我という関係で対話をしてくださる。執り成し人として執り成しもしてください。と同時に、お前たちの中にあつて一つとなつてくれるぞ」

と。「エン」であり「パラ」であるところの、「イン」でありまた「ウイズ」であるところの、そういった在り方をもつて聖霊が私たちのために執り成してください。

²⁰その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを

汝ら知らん。

ほら、「神―キリスト―我ら」というものが一つになつてしまった。みんな

「居る、居る、居る」

という、みんな中にある。もう三重の円の世界である。私たちとキリストと神がみんな、同質の聖霊がこの中に充満している。そういう事態をキリストは言う。これが本當のミステリオンの世界です。これが本當の現実なんです。これが本當の根源現実の世界です。そして、それがボケてしまうのではない。どこまでも、

「神―キリスト―聖霊―我」

ははつきりしています。でありながら、完全に一つになつています。こういうことです。

もし、そうでなかったならば、私たちは、

「俺はもう完全に一つだ。霊的に俺はもう大丈夫だ」

なんて思つたら、ガタンと落ちる。そういう傲慢に、霊的傲慢に陥つたら、これはサタンに囚われる。どこまでも平伏しです。この聖霊の立つところには、いわゆる自我というのが立たない世界です。

¹⁸我なんじらを遣して孤児^{みなしご}とはせず、汝ら^{きた}に来るなり。

「孤児としないよ、聖霊をもつてやつて来る。やがて世の終りにまたやつて来るよ」



と。再臨のことです。

19 暫くせば世は復われを見ず、されど汝らは我を見る、われ活くれば汝らも
活くべければなり。

「私は生きているよ。私は十字架を通って、今度は本当に霊的な生命をもつて生きているが、お前たちも聖霊を受けとれば、もう死んでも死なない生命がある」
と。それだから、もううれしくてしょうがないですよ。

20 その日には、我わが父に居り、なんじら我に居り、われ汝らに居ることを
汝ら知らん。21 わが誠命を保ちて之を守るものは、即ち我を愛する者なり。
我を愛する者は我が父に愛せられん、我も之を愛し、之に己を顕すべし」

「お前の中で私が顕れるぞ。キリストの栄光が顕れ、神の栄光が顕れるぞ」

と。パウロもよく言ってます、コリント書で。では。

●獨協大学校歌

作詞 小池辰雄

作曲 萬澤 遼

1. 天の原ふりさけみつつ さし昇る陽を胸に抱きて
朝風薫る大地を歩み 浩然の気をつねに養なう
獨協学徒の英姿をみよや
法を遵りて自由あり 学を修めて人ぞある
ああ 建学の精神は高し ああ 建学の精神は高し

2. 関東は草加のほとり 沢に白鷺 野べには蓮華
柳の影に筑波は応え 樅の梢に富士の峯映えて
城と聳ゆるわが獨協に 昂星燦たる友誼あり
天地を貫く師道あり ああ 協同の精神は深し
ああ 協同の精神は深し

3. 万国の文化の粹を 大和心に豊かに集め
独創妙なる業を進めて 世界に雄飛の壮志を抱く
わが獨協の学風ゆかし 天に即して大和あり
真理を愛して生命あり ああ 創造の精神は広し
ああ 創造の精神は広し

